

内田道夫 編

中国小説の世界

評論社叢書



評論社叢書 6 中国小説の世界

昭和45年12月10日 初版発行

¥790

編 者 内 田 道 夫

発 行 者 竹 下 み な

印刷所 三 倉 印 刷

製本所 有限会社友晃社製本

発 行 所 株式 評 論 社
会 社

〒101 東京都千代田区神田神保町2ノ16

電話代表 (265)1961

振替東京 7294

(検印省略)

落丁・乱丁本は本社にてお取りかえいたします。

(A-1)

田道夫 編

中国小説の世界



評論社叢書 6

目次

序 中国小説の流れ……………七

中国小説の流れ……………内田道夫……………九

I 南柯の一夢——文言小説の成立と展開……………一三

六朝・唐時代の小説の背景……………内田道夫……………一五

怪奇を追って（「志怪」の世界）……………梅津邦彦……………二五

夢と現実（「伝奇」の世界）……………江丙堂……………二六

II 目連の地獄めぐり——白話小説の成立……………三〇

五代・宋・元時代の小説の背景……………小川陽一……………三〇

仏教と語りもの（「変文」の世界）……………小川陽一……………三〇

庶民の哀歎（「話本」の世界）……………小川陽一……………三六

III 梁山泊への招待——白話小説の開花——……………七

明時代の小説の背景……………小野四平……………七

英雄への憧れ（『三国演義』の世界）……………趙 廼 桂……………二

抵抗への熱情（『水滸伝』の世界）……………阿部兼也……………一〇四

豪商と淫女（『金瓶梅』の世界）……………志村良治……………一六

空想への飛翔（『西遊記』の世界）……………内田道夫……………一三

正義は招く（「公案義侠」の世界）……………莊 司 格……………一四

人生の万華鏡（「短篇白話小説」の世界）……………小野四平……………一五

IV 牡丹燈籠——文言小説の系譜——……………一七

怪奇と夢と恋の物語（文言小説の世界）……………内田道夫……………一七

V 紅樓の哀樂——白話小説の成熟——……………一五

清時代の小説の背景……………志村良治……………一七

諷刺の砦（『儒林外史』の世界）……………阿部兼也……………三一

家と青春（『紅樓夢』の世界）……………塚本照和……………三〇

女豪傑の活躍（『兒女英雄伝』の世界）…………… 莊司格一…………… 三三四

官吏の生態（『官場現形記』の世界）…………… 三宝政美…………… 三三四

VI 阿Qのこころ——現代小説への起点——…………… 二五七

清末・民国初期の小説の背景…………… 三宝政美…………… 二五九

都会の夜（『海上花列伝』の世界）…………… 長尾光之…………… 二六九

新時代への啓示（『翻訳小説』の様相）…………… 細谷草子…………… 二七六

新文学のめざめ（『魯迅』）…………… 細谷草子…………… 二九一

あとがき…………… 三〇三

付録 中国小説の翻訳および研究文献一覧…………… 三〇七

中国小説年表…………… 三一九

中国小説史参考地図…………… 三六八

序 中国小説の流れ



変と変文（牟度叉闍聖変—降魔変—画卷ペリオ4524，パリ国立図書館蔵） 変文は絵ときの文であるとされていたが、この画卷の発見によって、それが立証された。牟度叉（ラウドラークシャ）と舍利弗（シャーリプトラ）の法術くらべの一齣で、この絵の裏面（写真左にまきとられた部分）に降魔変の韻文の部分があき書きされている。聴衆に絵を示しながら、この物語を説き聞かせ、とくに正確な記憶を要する韻文の箇所を書きしるし、唱いの助けとした。変文は中国小説の流れの上に大きな転回点をなし、口語小説の起点として位置づけられる。

中国小説の流れ

小説の起源

小説は人生の伴侶である。近世以降の歴史において、小説が文学に占める地位はますます重要さを加え、小説が人生に関与する意味もいよいよ大きくなった。しかしながら、そうした小説もはじめは巷のゴシップにすぎなかったのである。

小説に要求されるものは、内容が新鮮であり、興味深いことである。その意味では、小説の起源が人々にもてはやされた街の話題にあると説かれるのは、うなずかれることである。中国でもっとも古い図書目録『漢書藝文志』は学問の源流を知るうえに大切な文献であるが、そこには「小説家」（諸子略）の一項が設けられている。そして小説の性格を歴史的に規定して

小説家というグループは思うに稗官（稗は微小の意味で、稗官とは小官のこと、町の零細な話題を採集して政治の参考とするために置かれた役人であるという）から

出たもので、孔子の言葉（実は『論語』子張篇に見える子夏の言葉）に「小道とはいえ、必ず見るべきものがある。けれども遠大なことをはかるには、それになすむ恐れがある。だから君子はそれをおさめない」とある。だからといって小説は滅びもしない。村里の小さなもののが考えることで、忘れないように綴りとめてもおく。

かりに一言でも取るべきことがあるならば、これも民間野人の議というものである。

と述べている。小説のたぐいにも「必ず見るべきものがある」というのは、それが人生の姿を伝えているからである。漢の桓譚という学者は小説について「叢残の小話を合し、近くは譬喩を取り、身を治め家を理めるに、観るべき辞あり」（『文選』三十一の注に引かれた『新論』）と述べている。

この漢時代の図書目録に見える小説家の書籍はほとんど散佚して、知ることができないけれども、いわゆる小説の

中には、おそらく神話・史話をはじめとして、時事、寓話のたぐい、あるいは民間伝説が含まれていたことであろう。

俗説に、天地が開け、まだ人間が存在しないころ、女娲は黄土をねって人間を作ったが、劇務にたえかねて繩を泥の中にひき、それをはねて人間を作った。それで富貴のものは黄土の人間で、貧賤凡庸のものは繩の人間である（『太平御覽』七十八に引く『風俗通義』）

女娲や、伏羲は中国神話の代表的な神様であるが、それも小説には多様に伝承されてきたものと想像される。

志怪と伝奇

漢代以後さまざまな小説が書かれて、今なお文献に残されているものも少なくないが、その多くは長さの短い瓊語の集積で、著者の不明なもの、または疑わしいものが多い（魯迅『古小説鈎沈』はこうしたものを諸文献の中から抜きだしている）。けれども、そうしたものを数多くの文献が残されていることは、小説の発達を考えるうえに貴重な資料であって、神話時代に引きつぐ神秘主義の時代精神を、こうした小説の中にくみとることができる。またその中には魏多くの民間説話が残されていることも、特に注目すべきことであろう。これらは、おおむね鬼神の世界に深い関心を寄せているので「志怪」と呼ばれ、晋の干宝『搜神記』な

どに代表される。

これに対して人間世界に深い関心を寄せる一群の小説は、おそらく歴史の記録、人物の伝記の外廓をなす野史、別伝の類に出發するものと思われるが、これらにも興味深い記録が少なくない。その代表的なものとして裴啓『語林』、劉義慶『世説新語』などがあげられる。前者は減びてしまったが、後者は名著として後世多くの読者をもった。これらの小説群を志怪小説に対して志人小説と呼ぶものもある。

こうした小説の二つの流れをうけて、これを総合し、飛躍的な発展をとげたのが唐時代の小説である。これらは人生の奇なるものを伝えるという意味で「伝奇」と呼ばれるが、短編小説ながら一編の長さも長くなり、それ自身まとまった構成をとり、表現にも心をこらし、題材からいっても人生に関する豊富な問題が取りあげられるようになり、小説は面目を一新した。ここまでくると小説も、現代の小説の概念で律することができるような数多くの作品を出すようになった。その中には元稹の『鶯鶯伝』をはじめとして、後世の戯曲小説に影響をおよぼしたものが少なくない。

しかしながら、これらはおおむね知識人の筆になり、描かれた内容も知識人の世界を中心にしたものが多く、またその文章も文語文によるものであった。庶民の小説を考え

るならば、これら伝奇と並行して語りものが行なわれ、この形式のうちに庶民の文芸が育ちつつあったことに注目しなければならぬであろう。

語りものの文芸

語りものの形式がいつに始まるか明らかでない。後漢時代の墓から発見された明器（陶人形の副葬品）の中に太鼓をたたく律動的な人形が発見され、説唱俑と呼ばれているが、説唱が漢代に行なわれたことを傍証する文献はない。けれども、そうした語りものの形式が古くから存在したとしても、そう不思議ではない。おそらくそうした形式は仏教の流入にともない、印度文化の影響を受けて、いっそう盛行するようになったであろう。北魏時代には僧侶が「諸異を演唱」して仏教をひろめたことが『魏志・異域傳』に見える。唐時代になると寺院における絵とよびの形式は非常に一般的なものとなった。そしてその絵は菱相図と呼ばれ、その解説文は菱文と呼ばれた。これらは最初は仏の奇跡や経典の故事を物語ったものであろうが、しだいに世間一般の話題や時事を物語るようになり、語りものの文芸を育てていった。そして、やがては宋時代の盛り場で人気を呼ぶ大衆芸術となったばかりでなく、近世の口語小説の発達につながる、小説史上の重要な存在となった。

近世小説の成立と展開

宋時代を近世の発端とするならば、それは経済力を背景とする庶民の勃興によって特色づけられている。盛り場（瓦子）における娯楽芸術のにぎわいは、おのずと庶民の小説を育て、説話はやがて話本という形になって刊行されたというのも、いっぽうからいえば出版技術の進歩によるものである。浮動する口承の文芸が文字に定着する推移の姿を示すものとして注目される。このころ多くの短編や長編の小説が育てられた。その内容が宋・元の戯曲と共通するものが少なくないのは、演芸として共通の広場をもっていたからであろう。

長編小説でいえば、『三国演義』も『水滸伝』も、『西遊記』も、こうした庶民の演芸のうちに急速に成長し、雪だるまのように、さまざまの説話を吸収して、雄大な長編に発展していった。それが最終的にまとめられたのは明時代にはいつからで、その意味では明時代は口語長編小説の開花した、もっとも華やかな時期といえることができる。これらを『金瓶梅』とあわせて四大奇書と称するが、『金瓶梅』も明時代の作品で、庶民の生活の裏面を刻明に描いて、写実的な特色を示した。

いっぽう数多くの短編小説も、この時代に結集されて小

説集『三言』(『喻世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』)、『二拍』(『初刻拍案驚奇』、『二刻拍案驚奇』)すべて二百篇が続々と刊行された。これらが日本にも舶載されて、江戸時代の文芸に影響を与えたことは広く知られるとおりである。

こうした小説伝統をふまえて、清時代には『紅樓夢』、『儒林外史』のような長編の大作が生まれた。前者は作者の若き日の体験を作品化することによって追憶の記念塔をうちたてるとともに、当時の腐敗した現実をきびしく告発しようという意図が見られ、後者もまた当時の社会の矛盾や虚偽をあばく筆づかいは鋭く、主として科挙を中心とした当時の現実を、諷刺の手法をもってえぐり、人の胸をうつものが多い。そのほか『龍圖公案』などの伝統的な公案(推理小説)を大成した『三俠五義』や、また講談の妙味を生かした『児女英雄伝』も捨てがたいおもしろさをもっている。ここにいたって、中国の小説は完成の域に達したといえることができる。

いっぽう志怪や伝奇の伝統を迫る文言小説(文語小説)は明の瞿佑の『剪燈新話』の出現によって、あらたな息吹を与えられたが、清の蒲松齡の『聊齋志異』の出現により、多彩な幻想の世界を現実と接続させて特色を發揮し、ここでも小説は完成の域に到達したと見ることが出来る。

近代から現代へ

アヘン戦争以後の歴史を近代と称せられるが、西欧の文化が東進し、中国に大きな影響を与えた点が注目される。小説においても『海上花列伝』をさががけとし、『官場現形記』、『二十年目睹之怪現狀』、『老殘遊記』などにきびしい時代相が反映されている。これらの小説は口語で書かれているが、西欧の小説が翻訳によって中国に紹介されるにおよんで、小説もあらたな転機を迎え、新口語運動、いわゆる文学革命の提唱によって、まず形式が変化をむかえ、また西欧の小説の影響により、小説の理念も変容し、深化されようとしていた。こうした機運のもとに出現したのが魯迅の『狂人日記』で、それはゴーゴリの『狂人日記』の影響を受けたといわれるが、狂人の日記に借りて旧道德の虚偽をあばき、形式内容ともに旧套を脱した作品として天下の人々を驚かせた。彼の作品は世界の各国語に訳され、ロマン・ロランなどから高く評価された。

中国の小説は独自の歴史をもち、おのずからなる発展のあとを示してきたが、ここにおよんで世界の小説の流れに合したといえる。世界文学を考えるにつけても、また明日の小説を考えるにつけても、中国の小説の歴史はわれわれに多くのものを教えてくれるにちがいない。(内田道夫)

I 南柯か の一夢

— 文言小説の成立と展開 —



西王母像(三教搜神大全卷一) 西王母はもと怪物であったが、つぎつぎに美化され、老婆から美しい神仙となった。山海經西山經に「豹の尾、虎の齒をもち、よくうそぶき、ふりみだした髪に飾りをつけ、天の疫病、五刑を司る」とある。これが漢武内伝になると、絶世の美女となり、以後この美女のイメージがうけつがれ、人間的となり、写実化されていった。

六朝・唐時代の小説の背景

古代世界と小説

「神農は結むす鞭むちをもって百草を鞭うち、ことごとくその平毒寒温の性、臭味のつかさどるところを知り、もって百穀を播く。故に天下のもの神農と号するなり」(『搜神記』卷一)とは小説に残った農業神の記録である。

遠い古代にあって、きびしい大自然の中に生きた原始人が山野に食を求めたとき、あるいは猛獣に生命を奪われ、あるいは毒草に気を失ったことであろう。そうした経験はやがて人間に安全な、そして有益な食物を教えていったことであろう。そこに農業神の誕生がある。『山海經』に見えるさまざまな鳥獸草木の記載には「食べられる」「食べると死ぬ」「食べると……に効く」というような説明がつけられているのも、そうした古い時代からの人間の体験が記録にあとをとりだめているものと考えられる。

部族や社会がしだいに秩序を整えて法制が設けられる。しかしながら古代世界にあっては罪の裁きも神秘的なもの

に委ねられていた。いわゆる神盟裁判の記載が小説に残されている。「熱湯をわかし、金の指環をその中に投げこんでおいて、手で湯を探らせると焦れる」。正しいものは手が爛れない。罪あるものは手を入れると焦れる」(『搜神記』卷二また『異苑』卷三)これはタイ地方に関する記載である(『太平御覽』七一八に引く「扶南伝」また『南齊書』五八、「林邑国伝」にも同じような記事が見える)。小説がこうしたことに関心を示しているのは注目される。『日本書紀』にも探湯(応神天皇九年)の例が見られるが、こうした古代世界のさまざまな事象が小説に保存されていることが少なくない。もとより神話伝説もまた数多く小説に継承されている。

中国の歴史時代は殷周革命をへて、特色ある文化をうちだすようになったが、春秋戦国時代の諸国自由討究の風潮にのって、光り輝く文化の開花を見た。「莊子」に小説を飾って高名美譽を求めぬ。(『逍遙遊』篇)